



静脩

1988年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 3

図 書 と 学 術 情 報

理学部教授 川 那 部 浩 哉

『静脩』前号では、朝尾直弘教授が「図書館と博物館」と言う題で書いておられる。今回は私に、何か学術情報に関係したことを書くようにとの依頼があった。前号を横においてそれを眺め、それをなぞりながら、何か書くべく努力してみることとしよう。

「図書館は〈書物〉を扱い、博物館は〈物〉を扱う」。これは自明のようである。それでは〈学術情報〉は本来、どこでどのように扱うべきものか。いやそもそも、〈学術情報〉と〈書物〉との関係はどうなのか。

一般的な考えは、おそらく次のようなものであろう。「従来、学術情報は専ら書物のかたちで収集されてきた。しかし技術の発展に伴い、書物のかたちにはならない学術情報がたくさん現れて来た。マイクロフィルム・映画・ビデオ・コンピューターディスクなどは、その典型例である。つまり、今では学術情報は、書物という形式を持ったものはもとより、それ以外のさまざまな形を持ったものを包含するといっそう広い概念である」と。真にもっともな意見である。

だが私は、あえて違うところから出発してみたいと思う。すなわち、朝尾さんが「第一次資料で

ある〈物〉」を、「図書のように人間の頭の中を通過し、整理して発信された二次的な情報」と、とりあえず対置しておられるのに、先ずはなぞらえるところから始めてみたいのである。

私の見るところでは、学術情報自体にも同様に、一次資料的なものと二次資料的なものがある。国勢調査による地域別・性別・年齢別人口統計表等というのは、一次資料に近いだろう。新しく発明された機械についての性状の説明図などもそうであろう。自分の仕事にもう少し近いところと言えば、ある海域におけるプランクトン(浮遊生物)の地点別・層別・種類別分布表などもそれに入る。この一番最後のものは、原子力あるいは火力発電所などの建設・維持に関連して、近年著しい量の資料がさまざまな所で集められていると聞くと、全く公開されていないらしい。もったいないこと、夥しい話である。それはともかくとして、こういうものは、それが〈図書〉のかたちで出されようと違ったかたちで出されようと、意味には変わりがないわけであって、その点、一括して考えるほうが相応しいのではあるまいか。

二次資料と、いちおう考えられているものにも、実はいろいろのものがあろう。いわゆる学術

論文と言われるものの中にも、比較的一次資料に近いものもあるし、どう考えてもそうでないものもある。ある決まった機械で、あることを測定した結果がとにかく書かれているといった論文もたくさんあるが、これはどちらかと言えば一次資料に近いだろう。ある動物の行動が克明に記載してあるものも、もしそれだけのことであればこれに入る。悪口好きの人間はこれを〈論文〉とは言わず、〈報告〉あるいは〈報告書〉と呼ぶことにしているようだ。万一間違っただけで受け取る人があるといけないから、急いで付け加えれば、これは真の意味の報告書を論文よりも価値が低いと言っているわけではない。

本当のところは少し違うような気がするのだが、あえて早判りの言うならば、上に述べた一次資料的なものとか〈報告書〉のたぐいは、事実が間違っていれば何の意味もないし、後でそう解ればそのときその価値はますますなくなってしまう。それに対して上に言った意味での〈論文〉は、後に事実にくらかの誤りが発見されたとしても、「微動だに」とは言わないが、ある価値を持ち続ける。その得ようとする結果に至るまでの過程なり、得られた結果をいかに考えたかが、その後の人間の思考に重大な影響を及ぼし、したがってそれこそ、科学の発展に寄与し続けるからなのである。

〈学術情報〉という言葉には、こう考えてくると、少なくとも三つの意味が存在するのではないかという気がして来る。一つは、先に述べたような書物という形を持ったもののみならず、その他さまざまな形式を持ったものを含めた、総称とする用法である。二つめはここで述べて来たような広い意味であって、つまりその中に広く一次情報的なものと二次情報的なものを含めた、これまた総称と考える用法である。ここまでは、今までのおさらいだ。しかし巷間、学術情報を第三の意味、すなわち専ら一次情報に近いものを特定するかのようを使う例もあるような気がする。これはあるいは、〈情報〉という言葉自体に時に付きまとう、何かうさん臭い感じと関連があるのかもしれない。

もし、この私の感じにいくらかでも当たっているところがあるとすれば、学術情報にはこの第二の用法と第三の用法とのあることを、先ずははっきりと知っておく必要があるのではないか。つまり研究・教育の発展にとって、一次情報的なものと二次情報的なものとは互いに違った意味で、しかし同等に重要なのだという、ごく当たり前のことを改めて認識することである。

「何をいまさらのように、馬鹿なことを言っているのか」と思われる向きもあろう。だがこれを曖昧にしておくと、たとえば次のようなことが問題になって来はしないか。

今、極めて多量の一次情報的なものを特に強く必要としているのは、〈急速に進歩している〉分野である。よその国の学位申請論文（いわゆるセージス）などについても、それが正式の論文になるのを待たず、直ちにあるいはできるだけ早く見たいものだと思う研究者は数多い。ついでに言うと、いくつかの国での特にいま〈発展〉している学問領域では、学位申請論文自体が一次情報に限りもなく近くなっている。ところでこういう場合の一次情報的なものの多くは、数年をたたずして役割を果たしてしまふ。学術雑誌の中にも、こういう言わば使い捨てめいたものがかなりあり、続々と新しく刊行されている。そしてそれは、短い期間はやはり必要なのである。逆に言えば、ある期間がたつとそれは全くと言って良いほど不必要になってしまうのだ。

しかし一次情報的なものの中には、永遠に必要な欠くべからざるものもある。発掘の克明な報告書などはその典型例だろう。私に近いところ言えば、生物の新種の報告なども、すぐに判ってもらえるこの例である。こういうものは、むしろ時代が立つにつれて益々重要になってくることが多い。

そして、次にほんものの論文がある。発表のときはごく少数の人にしか読まれなかったけれども、ずっと後までも、それを引用することなしには学問の進まぬというもの、意外に思われるかもしれないが、少なくともいくつかの分野ではいまでも数多いのだ。中には、古典として後の世まで引きつづき読まれ、専門以外の人にまで多くの影響

を及ぼすものもある。

「こうしてみると」、〈図書〉のかたちを採っているかどうかにかかわりなく、一次情報的なものの扱いと二次情報的なものの扱いには、明確な「機能分掌」があっても良いのではないかという考えが、「浮かび上がってくるのである」。前者については数年毎に検討がなされ、集められたものの大部分は破棄されて、一部分だけが永久保存されるかたちに移されても良い。そして後者については、言うまでもなく永久保存が最初からの前提になる。

さらに言えば、前者に関してはそのとき大学に研究者のいないものは無視しても差し支えないが、

後者に関してはおよそ学問・研究に関係のあるものについては、そのときにそこに専門の研究者がいようがいまいが、総て収集しておくというのが原則でなければならない。

図書館がこの二つをとともに扱うことは、それはそれで良いであろう。しかし、扱い方は全く違うべきではないのか。そしてこれは、科学の、いや、学問研究全体の在りかたについていろいろ考えなければならない問題自体とも、いくらか似ているような気がしている。みんなで、こういう「関係を議論しておくことも大切なことと思っている」のである。
(1988年11月12日)

《「特殊コレクション」巡り》 ④

本草学関係文献紹介

本 草 文 献

薬学部教授 田 端 守

薬学部図書室に所蔵する特殊コレクションの最たるものは本草文献であるが、その紹介に先立ち、本草書の歴史について簡単な解説を加えておく。

「本草」という呼称は漢の時代から用いられ、「薬は草を本にする」ことが語源といわれている。事実、本草書が収載する薬品の大半は植物性の生薬であるが、動物・鉱物性生薬をも多数含むので、その内容は漢方医学で使用された天然薬物全般に及ぶ文献であるといえる。

最も古い本草書は、後漢の頃に成立したといわれる「神農本草經」（著者不明）であるが、後に陶弘景（452—536）が伝承薬物を365品（上薬120，中薬120，下薬125）に整理してそれぞれの性状と薬効を記録し、これに自ら選んだ他の薬物 365 品を加えて「本草經集注」7巻を著わした。この撰書が後世の本草文献の基礎となり、唐の高宗の時代（659）にこれを改訂増補した勅撰本「新修本

草」（850品目，原本存在せず）が刊行された。後者の写本の一部（5巻）は、国宝として仁和寺に保存されているが、その写真複製本が薬学部にある。

宋代になると、新修本草に薬物や文献の附加、改訂が次々に行われ、陳藏器の「本草拾遺」10巻（739）をはじめ、勅命による官製本「開宝重定本草」（974）、「經史証類備急本草」（1091—3）、「經史証類大觀本草」（1108）、「政和新修經史証類備用本草」（1116）、「紹興校定經史証類備急本草」（1159）、「重修改和經史証類備用本草」（1249）など、いわゆる証類本草が続々と編纂された。収載された品目の数も改訂につれて増加し、上記の大觀本草では1746品を数える。また記述も詳しくなり、各薬物の気味、薬効、別名、分布、採収・加工、参考文献の拔萃、調剤・投与法などを総括している。